

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26503006

研究課題名(和文)「漢語神学」のポリティックス グローバル中国の新しい公共圏と文化戦略

研究課題名(英文) Politics of "Chinese theology": new Politic sphere and cultural strategy in the global China.

研究代表者

緒形 康 (OGATA, Yasushi)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：40194427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：漢語神学は、漢語によるキリスト教の解釈と宣教にもとづいた現代中国の政治・文化・社会にわたる改革運動の総称である。それはキリスト教という近代中国における最大の他者を消去するナショナリズム運動として機能したが、その過程において、漢語による神学文献の言語的複数性や神学共同体の対抗的な他者性を、歴史のなかに顕在化させることになった。こうして、毛沢東主義や三民主義といった革命史観の影響下に、伝統の自主的な再生という物語をつむいできた中国近代文化史が、グローバルな普遍性への強い志向を有していることが改めて浮き彫りになったのである。

研究成果の概要(英文)：Chinese theology is a collective term for the reform movement over contemporary Chinese politics, culture and society based on the interpretation and mission of Christianity by Chinese. It acted as a national movement to eliminate the greatest others in Christianity in modern China. However, that process has inevitably made the linguistic pluralities of the theological documents by Chinese and the opposing others of the theological community appeared in modern China. In this way, it is revealed again that the intellectual history of modern China, which had long been regarded as the process of revitalizing the tradition voluntarily under the influence of revolutionary historical views such as Maoism and the Sun Yat-sen's Three Principles of the People, has a strong tendency to realize universality in the cultural globalization.

研究分野：人文学

キーワード：漢語神学 公共圏 グローバル中国 市民社会 公民社会 キリスト教 近代中国

## 1. 研究開始当初の背景

(1)漢語神学運動は1980年半ばの新啓蒙運動から始まった。劉小楓は、漢語神学という周縁から毛沢東主義に代表される共産主義の文化覇権に対抗する新しい神学運動を提唱した。

(2)1994年に香港で創設された漢語神学研究所(現在の漢語基督教文化研究所)は、大陸・台湾・香港のキリスト教運動を統合するアジア版エキュメニズムの運動を推進した。

(3)1997年の香港返還前後に、大陸と香港のあいだで漢語神学をめぐる激しい論争が起こったが、両者は互いの共役不可能性への自覚から、漢語訳の聖書・福音書にかんする大規模な文献の整理に着手した。

(4)2000年代半ばに生じた人権運動や新公民権運動は、漢語神学の運動と合流し、対抗圏の形成に無視し得ない影響力を持つにいたった。

## 2. 研究の目的

(1)漢語神学における翻訳解釈学を比較思想史の観点から研究する。香港語(広東語)と北京語の違いから生じる解釈の多様性を検討し、構造主義・現象学・脱構築・脱植民地主義といった文化学の方法論の影響の度合いについても探求する。

(2)漢語神学が切り開いた新しい公共圏や対抗公共圏にかんする資料調査をおこなう。北京の「家庭教会」や「民工教会」などの調査につき、優れた社会調査を発表している黄剣波氏などの協力を仰ぐ。

(3)漢語神学にもとづくグローバル中国の文化史を構築し、そうした文化史の有効性を検証するための国際コロキウムを開催する。

## 3. 研究の方法

(1)漢語神学の翻訳解釈学にかんして、宣教テキスト群にみられる香港語(広東語)と北京語の諸資料を整理し、神学の基本概念の訳語、聖書や福音書の翻訳文の相違などを検討する。

(2)漢語神学運動を担ってきた思想家の著作を広く収集するとともに、これらの思想家のうち、曾慶豹(台湾輔仁大学)、林子淳(香港漢語基督教文化研究所)、黄剣波(華東師範大学)の三氏にインタビューをおこなう。

(3)中国政府の発行する『中国宗教報告』が取り上げるキリスト教団・邪教教団・民間宗教につき関連情報を整理する。国家宗教事務局・中国統一戦線部・公安部が発行する民族

宗教関連の法令・規則集・布告などの資料をできる限り入手し研究する。

(4)漢語神学運動が推進した歴史文献研究と、新たな公共圏形成や文化戦略という二つの領域を総合し、グローバル中国の文化史を初歩的に構築する。

(5)本研究のまとめとして、グローバル中国の文化史の可能性を検討する国際コロキウムを神戸大学にて開催する。

## 4. 研究成果

(1)主な成果。以下の2つの研究成果を得た。

漢語神学運動の諸論争は、西欧的な「知」を受容する過程において、香港語(広東語)や北京語の差異などポストコロニアルな解釈の闘争を明るみに出し、キリスト教系「邪教」による対抗的な公共圏の形成の場面でも、従来の市民社会論からは予測できないようなヒト・モノ・情報の関係性の構築へと向かっている。漢語神学という他者の文化史は、「アジア神学」というカテゴリーを大きく逸脱し、キリスト教神学や西欧的な「知」の文化学・文化理論に対する再考を促し、その新たな可能性を拡大する契機を有している。

中国文化は、外国文化を同化する強力な磁場を有するものである。漢語神学とは、言語や文化の他者性を忘却させる上で、本来はきわめて有効な手段であるはずだった。つまり、漢語神学の運動は、言語や文化の他者性を消去する最大の手段となり得るものであった。しかしながら、1980年代半ばの文化熱(フィーバー)の過程から生まれたその歴史は、漢語神学文献の言語的複数性や、漢語神学自体の対抗的な他者性を、かえって歴史の前景へと押し出したのであった。毛沢東主義や三民主義などの革命史観の影響下に、西欧の問題を極力矮小化して、伝統の自主的な再生という物語を紡いできた、これまでの中国近代史研究は、この運動によって、より広いパースペクティブを獲得したと言えるであろう。ただ21世紀に入って、この運動の推進者の一人であった劉小楓が、毛沢東主義の再評価を唱え始めたことが象徴するような、中国ナショナリズムの側からする、漢語神学の取り込みや切り崩しが顕在化していることも、一方の否定し難い事実である。

本研究をまとめる国際コロキウム(漢語神学と東アジア・国際研究会)は、2017年2月24日、神戸大学大学院人文学研究科にて開催された。海外からは曾慶豹、林子淳、黄剣波の三氏が参加した。

学術報告のテーマは、漢語神学の「古典学」をめぐる文化と政治教会支配をとまなわない宣教活動におけ

る自己アイデンティティーの問題  
中国大陸における家庭教会の社会学的考察  
東アジアにおける政治神学の発展過程であった。

(2)得られた成果の国内外における位置づけ。研究代表者は、(1)の成果とは別に、「中国社会理論は何を前景化したのか？——市民社会と公民社会をめぐる論争二十五年史」(『現代中国と市民社会——普遍的《近代》の可能性』所収)を執筆し、漢語神学が中国における公共性の諸問題を前景化した意味につき、本研究のまとめに当たる議論をおこなった。そこでの議論は次の通りである。

「日本において、市民社会の構築は近代化の実現とほとんど同義であった。市場経済を民主化し、かつ国際化した時点で、市民社会を作ることができたと思った人は多い。中国の人々もやはり、少なくとも2008年までは、市民社会を作ることこそ最も大事な課題と考えていた。だが、GDPが世界第2位となり、あと数年でアメリカを追い抜くことがほぼ確実な現在、もはや近代化が至上の価値であるとは信じられなくなったのである。だが、それと同時に、ここで新たに勃興していった国民国家としてのアイデンティティは、再度伝統中国に回帰していったようにも見える。中国は1978年の改革開放以来ずっと、中国共産党が構築してきた社会原理を、市民社会などの(西欧)近代の社会原理と調和させようとしてきた。2008年以後は、ここに儒教をはじめとする伝統中国の社会原理を取り戻そうという試みが加わるようになった。その試みの過程で、人々は、西欧近代が普遍的な価値を見つけたずっと以前から、伝統中国が天下主義というもう一つの普遍的な価値を持っていたことに気付いた。そうであるならば、市民社会と天下主義のうち、果たしていずれがより普遍的なのかと人々は問い始めたのである。現代中国が天下主義という普遍主義に向かおうとしていることは、多くの場面で確認することができるだろう。グローバルな市民社会に関する議論が、そのことを良く示している。こうした現実のプロセスのなかでこそ、真の意味で「普遍的なもの」とはいったいなにを意味するのかが、再度根源的に問われることになる」(同書、あとがき)

この文章を収録した論文集は、日中の社会理論の研究者による公共圏にかんする共同研究の成果である。こうした共同作業をつうじて、本研究の成果を、漢語神学の視点から市民社会・公民社会を考察する試みとして国内外に発信することができた。

(3)今後の展望。三年間の研究によって、漢語神学が切り開いた言語文化の複数性や対

抗的な共同性を明らかにすることができ、漢語神学という切り口からグローバル中国の文化史を展望することの意義が改めて確認された。国際コロキウムをつうじて形成された学術ネットワークを今後さらに拡大し、グローバル中国にかんする新しい社会理論を構想してゆくことが求められている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計20件)

(1) 緒形康、近代儒学と全球上の普世価値、国立台湾大学人文社会高等研究院院訊、査読有、第12巻第1期(総第42期)、2017、[http://www.ihs.ntu.edu.tw/10publications/2\\_420logata.htm](http://www.ihs.ntu.edu.tw/10publications/2_420logata.htm)

(2) 緒形康、他、中国公民社会の制度的環境(俞可平著、翻訳)、現代中国と市民社会——普遍的《近代》の可能性、査読無、2017、pp. 102-154.

(3) 緒形康、公民儒教の進路——陳明先生訪問記(陳宜中著、翻訳)、現代中国と市民社会——普遍的《近代》の可能性、査読無、2017、pp. 267-292.

(4) 緒形康、天国のティートーク(劉軍寧著、翻訳)、現代中国と市民社会——普遍的《近代》の可能性、査読無、2017、pp. 293-315.

(5) 緒形康、中国社会理論は何を前景化したのか？——市民社会と公民社会をめぐる論争二十五年史、現代中国と市民社会——普遍的《近代》の可能性、査読無、2017、pp. 511-535.

(6) 緒形康、宗教還是文明：政治神学在近代東亜、“漢語神学与東亜”国際研討会論文集、査読無、2017、pp. 43-52.

(7) 緒形康、胡適对儒教起源的詮釋学、“胡適与新文化”国際学術研討会論文集、査読無、2016、pp. 643-653.

(8) 緒形康、予言還是教学？——胡適的儒教解学、東亜文明交流国際研討会論文集、査読無、2016、pp. 103-115.

(9) 緒形康、近代中国史上“文芸復興”之夢の意涵、「思考東亜」——20世紀東亜關於“文明”、“民族”与“世界”觀念變遷的視點、国際学術研討会論文集、査読無、2016、pp. 47-60.

(10) 緒形康、近代儒学と全球上の普世価値、東亜視域中中国人文学術的傳統与現代国際学術研討会論文集、査読無、2016、pp. 65-75.

(11) 緒形康、愛国と民主の背後にあるもの

——水羽信男『中国の愛国と民主——章乃器とその時代』を読む、現代中国研究、査読有、第37号、2016、pp.141-148.

(12) 緒形康、中国政治における支配の正当性をめぐって、中国リベラリズムの政治空間(アジア遊学 193)、査読無、2015、pp.26-47.

(13) 緒形康、中国の憲政民主への道——中央集権から連邦主義へ(王建勛著、翻訳)、中国リベラリズムの政治空間(アジア遊学 193)、査読無、2015、pp.307-331.

(14) 緒形康、他、座談会：中国リベラリズムから中国政治を展望する、中国リベラリズムの政治空間(アジア遊学 193) 勉誠出版、査読無、2015、pp.4-25.

(15) 緒形康、「第二の敗戦」論——二〇一〇年以後の中国と日本、復旦大学日本研究中心第25届国際研討会“冷戦後日本社会文化的变化及对中日關係の影響”(2015年11月7-8日)會議手冊・論文集、査読無、2015、pp.40-47.

(16) 緒形康、「秘教的な儒教」への道——現代中国における儒教言説の展開、現代中国のリベラリズム思潮——一九二〇年代から二〇一五年まで、藤原書店、査読無、2015、pp.447-474.

(17) 緒形康、近代化と「アジアの想像」、近代東アジアのアポリア(日本学研究叢書8) 台大出版中心、査読無、2014、pp.337-355.

(18) 緒形康、陳独秀——永遠なる反対派、講座 東アジアの知識人 第4巻 戦争と向き合って——満洲事変～日本敗戦、有志舎、査読無、2014、pp.84-101.

(19) 緒形康、アジア想像の思想史、台湾東亜文明研究学刊(「東亜思想伝統及其現代転化」専号) 査読有、第11巻第1期(総第21期) 2014、pp.49-76.

(20) 緒形康、『東アジア知識人のモダニティーに関する省察』序論(徐興慶著、翻訳)、海港都市研究、査読有、第8号、2014、pp.150-162.

〔学会発表〕(計8件)

(1) 緒形康、晚清中国对走向文明国家之双重構想、中国人民大学史学前沿系列講座第4講、2017.3.16、北京市(中国)

(2) 緒形康、嚴復怎樣將西萊『政治科学導論』訳成『政治講義』、中国人民大学清史研究所学术講座、2017.3.15、北京市(中国)

(3) 緒形康、丸山眞男思想史研究之最後境界、跨文化論壇第1講(中国社会科学院文学研究所) 2017.3.14、北京市(中国)

(4) 緒形康、史学与經学的較量——中国近代学术史上的一個特殊年代(1923-1937)、近代史所学术論壇(2016年第20期)(中国社会科学院近代史研究所) 2016.12.19、北京市(中国)

(5) 緒形康、近代中国史上文芸復興之夢の意涵、京師倫理学講座(北京師範大学哲学学院倫理学与道德教育研究所) 2016.11.15、北京市(中国)

(6) 緒形康、近代中国史上“文芸復興”之夢の意涵、「思考東亜」——20世紀東亜關於“文明”、“民族”与“世界”觀念變遷的視點、國際学术研討会、2016.10.29、上海(中国)

(7) 緒形康、丸山眞男与中国政治思想史研究的可能性、東亜区域研究群学术講演会(中央研究院近代史研究所) 2016.8.12、台北市(台湾)

(8) 緒形康、政治憲法学与規範憲法学在当代中国、「憲政主義与近代東亜」小型工作坊(中央研究院近代史研究所)、2016.4.8、台北市(台湾)

〔図書〕(計3件)

(1) 緒形康 他、勉誠出版、現代中国と市民社会——普遍的《近代》の可能性、2017、630

(2) 緒形康 他、神戸大学大学院人文学研究科、「漢語神学与東亜」國際研討会論文集、2017、63(43-52)

(3) 緒形康 他、勉誠出版、中国リベラリズムの政治空間(アジア遊学 193)、2015、352

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

緒形 康 (OGATA Yasushi)  
神戸大学・大学院人文学研究科・教授  
研究者番号：40194427

### (2) 研究協力者(海外協力研究者)

曾 慶豹 (CHIN Ken Pa)  
林 子淳 (LAM Jason Tsz-shun)  
黄 劍波 (HUANG Jianbo)